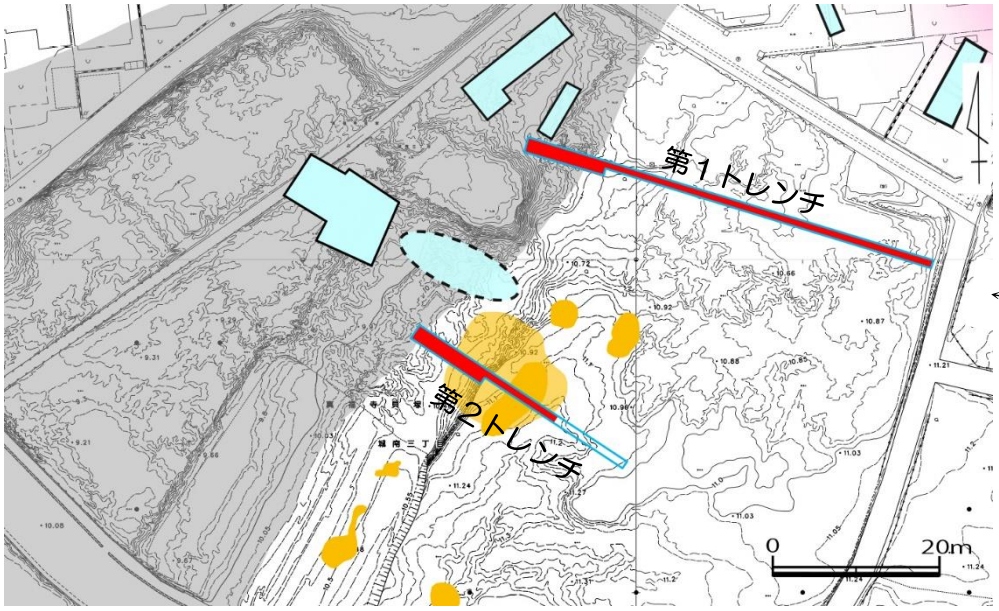
令和２年（２０２０）

■ １２ 月

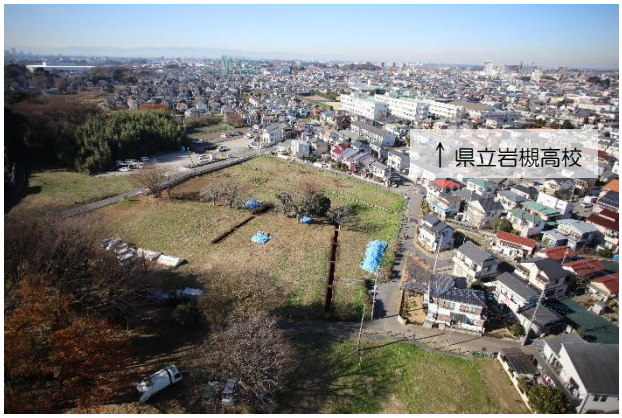
調査終盤の１２月１８日（金）、今年度の発掘調査範囲の航空写真測量を行いました。あわせて上空からの俯瞰写真も撮影しました。

縄文時代には、今からは想像もつかないくらい高く生い茂った樹木もあったかと思いますが、それでもさすがにこの高さまで成長した大木はなかったのではないでしょうか。真福寺縄文人たちが目にしたことのない高さからの光景です。

谷（泥炭層遺跡）際までびっしりと住宅が建ち並んでいて、真福寺貝塚の史跡指定地は、貴重なオープンスペースと緑地になっていることがわかります。写真左手奥の地平線際には、3,000 年にわたり真福寺縄文ムラの盛衰と変容、そして今進みつつある「再生」を見続けてきた秩父の山並みが、静かにたたずんでいます。



←写真１の撮影方向



≫写真１　高まり東部上空から西側をのぞむ　≫写真２　令和２年度調査区を真上から

令和２年（２０２０）

①第１トレンチの調査

北側の第１トレンチでは、縄文時代後期後葉安行 2 式の斜面堆積層中から、本地点 2 点目のミミズク土偶を検出しました（写真３）。前回のミミズク土偶の出土場所からわずか 2m 弱の斜面下方から姿を現しました。

≫写真３　ミミズク土偶が出土したところ
（緑の○。黄色は前回の出土位置）

残念ながら、頭部のみの出土でしたが、前回のミミズク土偶では欠損していた両耳の表現部分も残存しており、顔の表情がとてもよくわかる土偶でした（写真４）。

この土偶は、前回出土したものより下層から出土しました。今後、両者を見比べ、顔面表現がどのように変化しているのか検討していく予定です。

≫写真４　２点目のミミズク土偶

≫写真５　（参考）11 月に出土したミミズク土偶

②第２トレンチの調査

南側の第２トレンチでは、谷縁辺部の高まり部分から窪地にかけての調査区を完掘しました（写真６）。高まり部分では、住居跡や土坑、焼土跡など多数の遺構が切り合った状態で見つかっています。

なお、これまでに調査の状況をお知らせしてきた、高まり頂部で見つかった焼土跡は上部に灰層をともなっており、下部には火床面が良好な状態で残存していました（写真６の➡。写真７）。上部に堆積した灰は、今後の分析に備え、全量サンプリングを実施しました。

≫写真６　第２トレンチ高まり部分の完掘状態

令和２年（２０２０）

≫写真７　掘りあがった焼土跡

③調査を終えて

今年度の調査は、第１、第２トレンチの両斜面部を残し、ほぼ完掘しました。完掘できなかった谷の斜面部は、来年度の調査に備え、調査面に土のうを敷き詰め、ブルーシートで養生した後、埋め戻しを実施し、今年度の調査を終了しました（写真８）。

調査で使った道具などの搬出が完了したのは、年が改まった１月５日（火）。酷暑や寒さの中でも黙々と調査作業を進めてくださった調査スタッフの皆さんの姿は遺跡から消え、小学生の体験発掘や見学会でときおり訪れたにぎわいも夢のよう、令和３年度の発掘調査開始まで、真福寺貝塚はしばし静寂につつまれています。

令和２年度の調査の成果を楽しみにしてくださった皆さん、ありがとうございました。令和３年度にまたお会いしましょう。

≫写真８　遺跡保護のための養生